なぜ人は自殺するのか

～ 自殺原因帰属における原子価の影響について ～

小　原　　優

Why do people commit suicide?
The effect of valency on the attribution of cause to suicide.

Yuu OHARA

奈良大学大学院研究年報　第16号別刷　平成23年3月

Reprinted from Annual Reports
of The Graduate School of Nara University
No. 16, March 2011

なぜ人は自殺するのか

～ 自殺原因帰属における原子価の影響について ～

小　原　　優*

Why do people commit suicide?
The effect of valency on the attribution of cause to suicide.

Yuu OHARA

要　旨

自殺思考（自殺願望）について、パーソナリティの一側面である原子価との関連を調べた。自殺者の研究においては、本人の認知の狭窄（心理的視野狭窄）が認められることや、データ収集が難しいことなどから、心理的な面からのアプローチが難しかった。そこで帰属理論における原因帰属（自己知覚理論）を用いて、誰もが経験し得る自殺思考のみに焦点を当てて、パーソナリティとの関連を調べた。予備調査において自殺の原因帰属を調査したところ、対象関係的な「つながりの喪失」が大きく関わっており、それを軸として4つの類型に分けることができた。その結果をもとに、自殺原因帰属尺度を（SCA）を作成し調査した。SCAの結果と、個人の原子価構造を測定するVATによる結果との関連を調べたところ、関連があることが確認された。その結果から、誰もが自殺思考を持ち得ること、パーソナリティにおける個人差のあることが示された。また、自殺研究における新しい研究法が示された。

キーワード：自殺、原因帰属、原子価

誰もまだ、自殺者自身の心理をありのままに書いたものはない。それは自殺者の自尊心や或いは彼自身に対する心理的興味の不足によるものであろう。

君は新聞の三面記事などに生活難とか、病苦とか、或いは精神的苦痛とかいろいろの自殺の動機を発見するであろう。しかし僕の経験によれば、それは動機の全部ではない。のみならず大抵は動機に至る道程を示しているだけである。自殺者は大抵レニエの描いたように何のために自殺するのかを知らないであろう。それは我々の行為のするように複雑な動機を含んでいる。

芥川龍之介『或旧友へ送る手記』

平成22年9月17日受理　*奈良大学附属高等学校スクールカウンセラー

問題と目的

1．自殺の現状

警察庁の発表によると、1998年に日本の年間自殺者数が32,863人になって以来、年間自殺者は3万人台を下ることがない。また、現実には自殺であるのに事故死や不審死と判定されている例もあるとされているので、自殺の実数はさらに多いものと考えられている。未遂者についても少なくとも既遂者の7.7倍は存在すると推定されており（高橋, 1992）、自殺は多くの人にとって身近な存在となっている。自殺に対しての対策は様々な分野で行われており様々な機関の連携によって体制作りが行われている。1996年には国連から国のレベルにおけるガイドラインも発表され、日本では2006年に自殺対策基本法が成立した。しかしながら未だに自殺者数は高い水準を維持している現状があり、新たな立場からの協力が求められている。

本研究では、自殺の原因帰属と自殺思考、パーソナリティに焦点を当てることで、自殺に関する新しい視点からの実証的研究を試みる。

2．自殺研究の歴史

自殺は、古くは哲学や宗教などから幾度となく論じられてきた。日本に限らず自殺は古くからタブーとされてきたが、同時に自殺を是とする道徳観や倫理観は、様々な変遷を経てはいるがそれぞれの社会に見ることができる。井口孝親（1934）は『自殺の社会学的研究』のなかで道徳を、一切の自殺を否定する単純道徳とある種の自殺を肯定する緩和道徳に分けヨーロッパの自殺の肯定と否定について述べている。自殺はどのような文化にも見られているが、社会学的に見ればその扱われ方には大きな違いがあり、同じ自殺という表現でも、自殺した人の行為の意味や、それを目撃した人の捉え方は、時代によって大きく変化している。 遺書の研究で自殺学を築いたEdwin Shneidman（2005）も自殺の定義づけにおいては時代と文化の設定における重要さを強調している。自殺の歴史は古く、原始社会にも存在していたとされるが（井口, 1934）、自殺という文化が時代、社会を問わず見られ、現代社会においても大きな課題として生々しく扱われること自体が自殺の特性を特徴付けるものでもある。心理学においても自殺は、学派を問わずに研究され続けているテーマである。

1）精神分析的観点

心理学における代表的な自殺研究について、まず精神分析的視点について述べる。

Freudが発表した症例論文では、ハンス少年の事例を除いたすべての論文に自殺の症候学が論じられている。Freud（1895）はそれらの症例から7つの動機を示している。

(1) 他者（特に親）に対する死の願望の自己処罰
(2) 自殺をよく考える親との同一視
(3) 他者（ライバル）への激しい憤怒の反動
(4) リビドーの満足の欠如
(5) 辱めからの逃避

(6) 救助の叫び

(7) 願望充足

Freud (1895) は、自殺はこれらの結果から発生すると考え、実際に自殺が遂行されるためには数々の強烈な動機が一度に働かねばならないことを強調した。Freudは当初、リビドー論の枠内で自殺について述べていたが、『快原則の彼岸』発表以後は、死の本能に基づいて自殺を論述している (Freud, 1920)。死の本能とは、有機体が本来の無機的状態へと戻ろうとする基本的傾向のことであり「生命ある有機体に内在する衝迫であって、以前のある状態を快復しようとするもの」である。Freudは死の本能の臨床的根拠として、陰性治療反応、反復脅迫、戦争神経症の不安夢、マゾヒズムなどを挙げ、これらの現象に見られる苦痛な体験の反復は快感原則を凌いで、より根源的、一時的、かつ衝動的であるとし、これらの反復脅迫をもたらすものとして死の本能という概念を仮定した。「有機体は、それぞれの流儀に従って死ぬことを望み、これら生命を守る番兵も、もとをただせば死に仕える衛兵であったのだ」とFreudは述べているが、その中で重要となるのは、生とは受動的に始まるものであるが、人間は自分の死のあり方についての「望み」を持つことができるという点である。

Freud (1920) は自殺について「自我が対象充当の逆転によって自分自身を対象として扱い、対象に向かっていた敵意を自分に向け、それが外界の対象に対するものと入れ替わったとき、自我は自らを殺す」と述べ、自殺では自我が対象に圧倒されていると考えた。自我にとって生きることとは、エスの代表者である超自我によって愛されることとされるが、ときに超自我が自我に憤怒し迫害すると感じたときには、自分自身を放棄することさえある。そしてこの際に超自我を支配しているものは死の本能であるとした。しかし、死の本能がどのような形で自殺へと繋がるのかについては系統的な論述は果たされなかった。

またHafsi (2009) は自殺について、Bion (1961) が提唱した原子価理論を用いて精神分析的に言及している。原子価理論についての詳細は後述する。

2）認知心理学的視点

Shneidman (2005) は、自殺の定義について「自殺とは自らがもたらした生命を止める意識的行為であり、ある問題に対して自殺が最善の選択であると認識する必要に迫られた人の多面的な病態と考えるともっともよく理解できる」と述べた。Shneidmanは「ある個人が何らかの意識的な意図に基づいて自らの命を絶とうとしたときにだけ自殺は起きる」とし、自殺が起きるときには常にある種の認識と意識的な意図が認められるとしている。ただし同時に、自殺が最善の解決策であると誤って認識された結果自殺は生じるとしていて、自殺を考えるのは本質的に誤った(あるいは異常な) ことではないが、自殺が唯一の解決方法であると考えることが異常なのであると述べた。

Shneidman (2005) はそのような、自殺を最善の選択肢であると認知する原因として焦燥感を挙げている。焦燥感が高まること自体が直ちに自殺の危険を及ぼすものではないが、重要なことは通常の状態、あるいは世界にとどまっているという一般的な状態にある人は自殺しないということである。また加藤 (1954) は「真の自殺とは、ある程度成熟した人格を持つ人間が、自らの

意志に基づいて死を求め、自己の生命を絶つ目的を持った行動を取ることに限らなければならない」とした。自殺の意思について大原（1965）も自殺を「自らを殺す行為であって、しかも、死にたいという意図が認められ、またその結果を予測しえた死である」と定義した。これらの自殺の定義において重要になるのは、何れの定義も本人の認知の上で意図的に自殺が行われることを重要視している点である。

3）社会学的観点

社会学者のDurkheim（1897）は自殺という現象を正しく、また十分に説明するには、個人的要因の研究だけでは不十分であり、社会的要因による社会学的説明が必要であると述べている。Durkheimは『自殺論-社会学的研究-』のなかで、『社会学的方法の基準』で確立された社会学的方法を用いて、自殺を引き起こす社会的要因による自殺の分類を試みた。心理学とは異なる観点であるが、重要な概念であると思われるので、ここに述べる。

ⅰ．自己本位的自殺

自己本位的自殺は、自殺者が属している社会集団の凝集性が弱く、その内面的な結束力が弛緩している場合に生じる自殺の形態である。従って、ある個人が属している社会集団の凝集性の度合いが弱いほど自殺率は高くなり、逆にそれが強いほど自殺率は低くなるという関係が見られる。例えば信仰集団の場合、プロテスタントの人々とカトリック教徒とを比較すると、プロテスタントの人々の方が自殺率は顕著に高くなる。プロテスタントはカトリックよりも信仰の動機や形態がより多く個人の意識に任されていて、信者自身による聖書の検討など、信仰を打ち立てる自由がより多く与えられている。

ⅱ．集団本位的自殺

集団本位的自殺は、自殺者の属する集団の凝集性や統制力があまりに強く、また彼がその集団に対して有する一体感や帰属性の度合いもあまりに強いが故に起こるものである。従って人々の属している集団の結束力が強く、彼らがこの集団に対して自己没却的である度合いが強いほど、この種の自殺は多くなるという関係が見られる。この傾向を説明するためにDurkheim（1897）はヨーロッパ諸国における軍人の自殺傾向が一般市民よりも大きいことを示す多くの事例を挙げている。

ⅲ．アノミー的自殺

アノミー的自殺は、社会が突然の危機に見舞われ、無規制状態（アノミー）に陥った場合に起こるタイプの自殺である。アノミーとは、人々の行動を規制する共通の道徳的規範の失われた混乱状態を意味する述語として、社会学の分野では広く使われている。アノミー的自殺では、社会的無規制の故に過度に肥大した人々の欲求が、危機的状態に直面して不意に満たされ得なくなったために起こる狂気じみた焦燥や激しい憤怒が動機となる。例えば、経済的好況がしばらく続いたあと、突如として大恐慌が訪れたような場合に成金たちが陥る焦燥がその一例であ

る。

iv. 宿命的自殺

宿命的自殺（Durkheimは『自殺論』発表当時、宿命的自殺は今日では重要性を持たないと言って自殺論の中では第四の自殺タイプとして記述していない）は過度の規制から生じる自殺であり、無情にも未来を閉ざされた人々の図る自殺である。こうした人々の情念は、抑圧的な規制によって圧迫されている。それにはあまりにも年若い夫や、子どものない妻の自殺が該当する。歴史的に見れば、ある条件の下で頻発したと言われる奴隷の自殺、すなわち極端な物質的・精神的仲裁の横暴を原因とするような自殺がこのタイプに当てはまるとされる。

Durkheimの『自殺論』は、発表された当時から多くの賛同者を得ながら、他面では様々な批判を受けた。特に、自殺の原因として社会的要因を強調するあまり、個人的・心理的要因を閑却したことがしばしば指摘される。個人が属する社会の制約や結束力が自殺の要因であるとしても、このような社会の制約に対する反応には多くの個人差があり、同じ社会条件の基にあるすべての人々が自殺するわけではない。

Durkheimの研究はそもそも個人の心理研究だけでは不十分という立場から始まっているので、そのような批判は不適当ではあるかもしれない。しかしながら『自殺論』で示された研究に、個人の内面的な視点や、統計には表れない数多くの自殺未遂者が無視されているのは事実である。自殺の歴史や社会学的検証は、自殺の現状と合わせて多くの視点を提供するものであるが、その出発点において個人が自殺をどう捉えているのか、個人の中で何が生じた場合に自殺が起きるのかについては無視されてしまう。しかしながら、そのような課題は心理学的観点に関しても言えることである。次に、それらの自殺研究の問題について述べる。

3．自殺研究の問題

自殺は心理学だけをとっても様々な分野からアプローチされているが、種々の研究に見られる自殺定義の複雑さからもわかるように、自殺の研究とは非常に困難なものである。

Durkheimは自殺を社会学的観点から自殺を 4 つに分類したが、その結果としてどのような個人が自殺するのかについては言及することができなくなった。このような自殺研究における課題はDurkheimに限らず、様々な研究においても共通な課題として残っている。

それらの課題は、自殺の傾向や原因などを直接研究したとしても、ある個人が自殺するかについては分からない、ということにまとめることができる。それは、それらの傾向や原因を持ちながらも自殺しない人が必ず存在するからである。どのような傾向や原因も、Shneidman（2005）が直接言及したように十分条件にはなり得るが、その条件の下に生きている（自殺しない）人の存在がある限り必要条件にはなり得ない。例えば高橋（1992）によれば、重傷のうつ病に罹患すると自殺の危険が高まることは明らかであるのだが、だからといってうつ病になった人全てが自殺するわけではない。うつ病よりも絶望感の方が自殺に深く関連するという研究もある（高橋, 1992）。また、自殺する人しない人を区別することは、種々の理論的検証からも臨床的にも可能

になっているとは言い難い。それは、様々なアプローチを受けながらも高い自殺率が維持されていることからも分かる。

次に課題として挙げられるのは自殺者が自分の自殺の原因をはっきりと分かっていない、という問題である。精神力動的観点からFreud（1895）が示した７つの動機に関しても、無意識下における動機を見て取ることができる。また、古来からタブーとされてきた自死、自殺は攻撃性と同じく、無意識下で処理され意識には上りにくい。高橋（1992）も「例えば意識が清明で、自ら死ぬ意志が確固として存在し、判断能力も保たれていて、行為のもたらす結果を十分に理解している場合ならば、自殺の定義はそれほど難しいものではないだろう」と述べている。また、自殺既遂者の研究において遺書の研究は、自殺者の心理を知る上で重要な手がかりとなるが、Shneidman（2005）は遺書研究について次のように述べている。

> 遺書には価値があり、魅力的な文書であることには疑いがない。自殺を研究する上できわめて重要なデータを提供してくれる。しかし、それは自殺行動を容易に理解するための王道ではない。遺書を熟読してもおそらくは失望する結果となる。

なぜこのようなことが起こるのかに対してShneidman（2005）は「目的が固定されてしまい、認知が狭窄し、精神力動的な否認の状態という、特殊な心理状態で、遺書が書かれているために、自殺を研究する者が期待しているほどには遺書からは深い洞察を得られないという仮説が立てられる」と述べ、自殺がまさに決行されようとしているときに認められる心理状態を「心理的視野狭窄」と呼んだ。Alvarez（1972）はこの状態を「閉ざされた自殺の世界」と呼び「ひとたび自殺の決断が下されてしまうと、閉ざされて、難攻不落で、完全に確信に満ちた世界に入ってしまい、すべての事柄、そしてあらゆる出来事がその決断をさらに確固たるものにしてしまう」と記した。自殺者の心理を研究する為には、それらの問題を対処していく必要がある。

それらの問題に伴って現れてくるのが尺度作成の困難さである。自殺の危険のある状態において心理的な狭窄が認められるならば、自殺の危険性を直接測ることは出来なくなる。Shneidman（2005）は致死性（その人がどれほど死への傾向が強まっているか）と焦燥感の評定を用いているが、致死性の測定は容易ではない。Shneidmanは自殺を「意識的な行為」であると位置づけているために自殺の危険性を致死性として直接扱っているが、同時に意識的な行為として現れるものしか測定することはできなくなる。また、Freud（1895）の言う自殺に至るプロセスも精神力動的であるが故に直接測定する尺度は存在しない。死の本能においても同様である。自殺研究に有用とされている尺度は、Beckの抑うつ評価尺度（Beck, 1993）などを始め、数多く開発されているが同様の課題を残している。

また自殺の理論的研究、臨床的研究、尺度開発、それぞれに言えることであるが、研究にあたって自殺既遂者に関する直接的な研究が不可能であるところにも大きな問題がある。自殺の既遂者からは、取り出せる情報がとても少ない。また成功率の高い自殺方法を用いながらも自殺に失敗した未遂者に対してのインタビューも試みられているが、遺書と同じくそこには心理的な狭窄が色濃く見られる（Shneidman, 2005）。自殺とは自殺企図があるなしに関わらず誰もが経験した

ことのないものであるから、自殺に関する直接的なアプローチが難しいのは当然のことと言える。

4．自殺への原因帰属と自殺思考

そこで本研究では、自殺思考（自殺願望）、帰属理論、及びパーソナリティ理論を用いて新しい視点から実証的研究を試みる。実証的研究において自殺は、自殺行動と自殺思考に分類される。自殺行動とは、実際に行われる自殺のことで、自殺思考は死にたい願望のことを指している。これまでの自殺研究においては自殺行動を基に研究が行われることが多く、自殺思考はそれに不随する形でしか扱われて来なかった。そこで本研究では自殺に関して、直接的に自殺行動を扱うことはせず、誰しもが経験し得る自殺思考のみに焦点を当てて研究を行う。

しかし自殺思考においても簡単に扱うことはできない。自殺思考を持つ、または自殺思考を持ち得ることを検証し、個人の自殺思考を正しく取り出すためには、その他の理論を併せて用いなければならない。本研究では、自殺思考を個人から取り出し、明確に扱うために帰属理論を用いる。

帰属理論とは、出来事や自己・他者の行動に関して、その原因を推論する過程、およびそのような原因推論を通して、自己や他者の内的な特性・属性に関する推論を行う過程に関する諸理論のことを言う。その中でも本研究では自己における原因の帰属、またはそれに伴う自己知覚理論のモデルについて取り扱う。自己に関する帰属とは、自分がした行動の原因を推論する、または自分の感情や態度のような内的状態を推論する過程である。自己知覚理論では、他者知覚と自己知覚のプロセスの類似性が強調されており、自己の内的状態の知覚においても他者の場合と同様に、行動とそれが起こった状況の性質を考慮した上で推論が行われるのだと主張されている(Bem, 1972)。

つまり本研究のおおまかな目的は、自殺思考を自殺における個人の原因帰属から捉え、パーソナリティとの関係を明らかにすることである。自己知覚理論を借りれば、他者における自殺の原因帰属の推論は即ち、自分の内面における原因帰属の推論と対応するものとなる。以上のことから、本研究の仮説は「自殺の原因帰属はパーソナリティとの関連があるだろう」とまとめることが出来る。

それを検証するため、本研究では第1研究と第2研究の、2つの研究を行った。

第1研究

1．目的

第1研究の目的は、自殺の原因帰属にはどのようなものがあるのかを明らかにし、それを基に第2研究で用いる尺度を作成するための予備調査を行うことである。

2．方法

1）対象と手続き

第１研究の対象は奈良大学学生33名である。授業中に質問紙を配布し、教示を読み上げ被験者が回答してから実験者が回収した。時間の制限は設けなかった。

2）尺度　予備調査尺度

自殺思考についてAさんの自殺の原因について推論させる（原因帰属）ストーリーと質問項目からなる自由記述の質問紙を作成した。

図１．予備調査尺度の結果

支持の喪失
大事な人を亡くしたことで大きなショックをうけた。
自分自身を全否定された。
一人ではどうしようもなくなった。
自分を必要とする人がいなくなったと感じるようになった。
頼りにしていた人から裏切られたと感じた。
問題解決能力の喪失
仕事が無くなった
借金を背負った。
大病を患った。
悩みを解決することができなかった。
努力の成果があげられなかった。
悩みを解決出来ず日常から逃げ出したかった。
親密関係の喪失
婚約者を失って生きる意味を無くした。
自分の周りにはだれもいないという不安が強まった。
近しい人が死んでしまった。
恋人を失った。
耐性の喪失
人間関係のストレスに耐えられなくなった。
人を誤って殺してしまい思い詰めた。
ストレスに耐えていたがそれが限界に達した。
逃げ場所がないと感じたから。

教示と自殺したAさんのストーリーを示し、質問項目に自由記述で回答させた。教示として**「次のお話は自殺してしまったAさんのお話です。話をよく読んで、①～③の質問にお答えください。正解はありません。自由に発想してあなたの考えを書くことが大事です。答える際に、なるべく詳しくお書きください」**と示し、次にストーリーを提示した。**「Aさんは自殺をするような人には見えない人でした。しかしあるときからAさんの雰囲気がガラリと変わってしまい、近しい人たちはその異変に気がつきます。心配をしてAさんに話しかけても、様子がおかしく別人**

のようで、誘いがあっても断るようになってしまいました。そして、Aさんの周りが、Aさんが自殺するのではないかと思い始めた頃、Aさんは死を決意し、自殺を選んでしまいます」。ストーリーに対して「Q1. Aさんは、何を理由に自殺を選んだのだと思いますか」と質問し回答を求めた。質問項目は全部で3つ用意したが本研究で使用したのは、Q1だけだった。

3．結果

自由記述の結果を自殺、及びパーソナリティに関する先行研究を参考にし、大学院指導教員と4名の心理学専攻の大学院生と共に内容分析を行った。

分析の結果、全ての回答に対人（対象）関係におけるなんらかの「つながりの喪失」が含まれることが分かった。そこで、全ての結果を「つながりの喪失」を軸として再検討したところ、図1に示されるとおり、支持の喪失、問題解決能力の喪失、親密関係の喪失、耐性の喪失の4つの喪失として分類することができた。

4．考察

内容分析から、自由記述の回答を喪失を軸に再検討し、原因帰属に見られる喪失を4つに分類することができた。これらの喪失の分類（喪失類型）を基に尺度を作成し第2研究ではパーソナリティとの関連を調べていく。

前述の通り、自殺の動機として考えられているものはいくつかあるが、自殺した人と同じような境遇における個人が必ずしも自殺するとは限らない。第1研究で得られた喪失類型はその意味で重要な意味を持っている。

個人における自殺の原因帰属が喪失を基に少なくとも4つの分類が成り立つということは、必ずしも一つの動機が誰しもにとって自殺を導くとは限らないということを意味する。現代の自殺において動機の明らかになっているものについては、（基準が定まっていない現状はあるが）病苦による自殺が一番多いとされている。しかし、病苦による自殺は確かに多いとしても、病に苦しむ人全てが自殺を考えるわけではない。もし喪失類型とパーソナリティの間に関連があることが示されれば、その理由を、個人個人の自殺の原因帰属における喪失の類型が異なっているからであると説明することができる。そこで第2研究においては、人間関係の一側面であるパーソナリティに言及し、以下の実証的な検証を行った。

第2研究

第2研究で扱うパーソナリティ理論については、自殺の原因帰属を対象関係的なつながりの喪失として捉えたので、「対象とのつながり」について言及されているBion、Hafsiらの原子価論を用いることとした。

1．目的と仮説

第2研究の目的は自殺の原因帰属と以下に述べる「原子価」というパーソナリティの側面との

図２．Suicide Cause Attribution

これから、以下のストーリーについての意見を伺います。
ストーリーをよく読んで、後の質問項目にお答えください。

〈ストーリー〉

Ａさんは人当たりが良く、温厚な性格の持ち主でした。しかしあるときからＡさんの雰囲気がガラリと変わってしまいました。近しい人たちが心配をしてＡさんに話しかけても、様子がおかしく別人のようになってしまいました。そしてある日、Ａさんは突然自殺してしまいます。

①あなたから見てAさんは、何を理由に自殺を選んだのだと思いますか。以下のそれぞれの項目が、どれくらい自殺の理由としてあてはまると思うか「非常にあてはまる～全くあてはまらない」のうちで数字に○印を付けてください。

	全くあてはまらない	あまりあてはまらない	どちらでもない	少しあてはまる	非常にあてはまる
1．信頼出来る人が周りにいなくなったと感じたから。	1	2	3	4	5
2．自分の能力に対する自信を失ったから。	1	2	3	4	5
3．健康な身体を失ったから。	1	2	3	4	5
4．自分に生きている価値がないと感じるようになったから。	1	2	3	4	5
5．逃げ場所がないと感じるようになったから。	1	2	3	4	5
6．人間関係のストレスに耐えられなくなったから。	1	2	3	4	5
7．自分らしさを認められていないと感じるようになったから。	1	2	3	4	5
8．自分の理想とする成果があげられなかったから。	1	2	3	4	5
9．自分の将来を望めなくなったから。	1	2	3	4	5
10．仕事上の地位を失ったから。	1	2	3	4	5
11．自分の弱みが露呈してしまったから。	1	2	3	4	5
12．自分は人の役に立てないと感じ始めたから。	1	2	3	4	5
13．生きるための目標が無いと感じるようになったから。	1	2	3	4	5
14．責任から逃れられなかったから。	1	2	3	4	5
15．世の中が嫌になったから。	1	2	3	4	5
16．財産を騙し取られたから。	1	2	3	4	5
17．自分を必要とする人がいなくなったと感じるようになったから。	1	2	3	4	5
18．頼りにしていた人から裏切られたと感じたから。	1	2	3	4	5
19．心の休まる場所がないと感じるようになったから。	1	2	3	4	5
20．人間関係に入り込みすぎたから。	1	2	3	4	5
21．自分をアピールできなくなったから。	1	2	3	4	5
22．頼りにしていた人を亡くしたから。	1	2	3	4	5
23．生活習慣が崩れてしまったと感じるようになったから。	1	2	3	4	5
24．親密につきあえる人がいなくなったと感じたから。	1	2	3	4	5
25．人に理解されなくなったと感じたから。	1	2	3	4	5

関連を調べることである。自殺の原因（喪失類型）帰属は、原子価の類型と関係があるだろうという仮説を元に検証を進める。

2．原子価

前述の通り第2研究では、原子価理論を用いてパーソナリティに言及する。

原子価理論は、Bion（1961）が対人関係、また個人のつながりを記述するために用いた概念である。Bionは、原子価とは自発的、衝動的な要素であり、努力や訓練を必要としない人間の行動における本質的な部分であるとしたうえで「確立した行動パターンを通じて、他者と瞬間的に結合する能力」と定義している。さらにHafsi（1992）は原子価について「一定の安定した形で対象と繋がるための個人的な素質や特性である」と再定義した。Bionは原子価の類型については述べていないが、Hafsi（2003）はBionの基底的想定理論に基づいて原子価ついて4つのタイプを定めた。すなわち依存原子価、闘争原子価、つがい原子価、逃避原子価である。

依存原子価（Dependency）：他者と依存によって繋がろうとする原子価を指す。縦的対人関係や相互作用的依存による繋がりを主とし、低い自己評価や他者の過剰評価が特徴である。他者を理想化し、その人に頼っていくしかないように振る舞う傾向がある。また、依存を必要とする人に対しては同一化による共感を示し、他者の役に立ちたいという思いから、他者からの依存を受け入れようとする。

闘争原子価（Fight）：他者と闘争によって繋がろうとする原子価を指す。他者に対して強い競争心や攻撃性を持っている。主な特性は自己主張、攻撃性、敵意、競争心、批判である。自己評価が高く、人の上に立ちたいという願望を持つことが特徴である。対人関係において積極性や活発性を発揮し、自分を表現してから相手の意見を求めることで他者と繋がろうとする。また、感情に左右されにくいため現実的な考えを持つ傾向がある。

つがい原子価（Paring）：他者とつがい的な関係によって繋がろうとする原子価を指す。親しい対人関係を好み、他者と個人的なレベルで付き合おうとする。他者に対して外向的で陽気に振る舞うが実際は常に孤独感がある。異性に対して積極的に振る舞うが、自分の友人や恋人に対しては嫉妬深い傾向がある。平等主義であり横的な繋がりを重視する。

逃避原子価（Flight）：他者と逃避的な関係によって繋がろうとする原子価を指す。葛藤のない対人関係を好み、関係を維持するために他者との間に一定の距離を置く傾向がある。また、他者との関係やグループ活動においては消極的で内向的である。他者からの規則や時間、責任の伴う地位などに縛られることを嫌い、人への依存も嫌う傾向がある。主な特性は、葛藤回避、逆依存、過剰な遠慮、プライバシーの重視である。

原子価にはこれらの4つのタイプが存在するが、個人が最も同一化しやすい原子価は1つだけである。Hafsi（2005）は、この最も頻繁に用いられる原子価のことを「活動的原子価」と名付けた。しかしこの概念は単なる類型論ではなく、人はどの原子価も示すことができる点から特性論と捉えることもできる。そこでHafsiは活動的原子価以外の副次的に用いられる原子価を「補助的原子価」と名付けた。補助的原子価は活動的原子価では対象との関係が結べないときに用いられる。従って補助的原子価は円滑な対象関係を結ぶための適応機能があると考えられている。

第２研究では、個人の原子価構造を測定するValency Assessment Test（VAT）と、第１研究を元に作成した尺度を用いて仮説を検証する。

３．方法

１）対象

研究に協力してくれたのは奈良大学学生152名である。うち男性は85名（56%）、女性は67名（44%）だった。

２）尺度

本研究で用いた尺度は第１研究を元に作成した自殺原因帰属尺度と、原子価の類型を測定するためにHafsiが作成したValency Assessment Testの２種類である。

自殺原因帰属尺度（図２：Suiside Cause Attribution=SCA）は第１研究で得られた結果を基に作成された尺度である。

教示と自殺したAさんのストーリーを示し、設問に１．全くあてはまらない～５．非常にあてはまるの５件法で回答させる。予備調査尺度と同じく、ストーリーでAさんの自殺の原因を推論させて回答を求める。設問は第１研究で定めた喪失類型を用いて、個々の喪失類型に当てはまる項目を作成した。一度質問紙を作成した後に心理学部学生とディスカッションを行い、項目の削除と追加を行った。またAさんのストーリーに関してもディスカッションを行い、修正を加えた。質問項目の数は全部で25項目である。項目作成にあたっては第1研究で求めたそれぞれの喪失類型を用いた。

個人の原子価類型を測定するためにHafsi（2010）によるVelency Assessment Test（以下VAT）を用いた。VATはBion（1961）の理論に基づき開発された文章完成式のテストである。質問項目はグループの状況を示唆する途中までの文章を示し、被験者に完成させるもので、被験者の対人関係の態度を分析することができる。依存５項目、闘争５項目、つがい５項目、逃避５項目、共同指標５項目の計25項目から構成されており、ランダムに並べられている。なお、VATおよび原子価については2010年に出版された「目に見えない人と人の繋がりをはかる～原子価査定テスト（VAT）の手引き～」で詳細に説明されている。

３）手続き

SCAは心理学関連の授業の時間を用いて、質問紙を配布し回答させてから回収した。実施においては教示とストーリーを口頭で読み上げ、時間制限は設けず全ての回答者が回答を終えてから実験者が回収した。

VATは心理学の授業の一環として授業内で実施されたものを使用した。実施の際は、実験者より10秒間隔で読み上げられた刺激状況（質問項目）に対して、あまり考えずに出来るだけ早く空欄を埋めるよう指示した。

5．結果

1）原子価の分布

VATによって得られた回答をHafsi（2010）による採点マニュアルを使用し全ての項目を1（否定的明白な行動）～8（肯定的明白な行動）に得点化した後、5つの分類（依存・闘争・つがい・逃避・共同指標）ごとに平均点を算出する。その結果のうち、共同指標を除いた4つの原子価の中で最も平均点の高いものを対象者個人のもつ活動的原子価と定める。

結果は、図3に示されている通り、依存87名（男性＝41, 女性＝46)、闘争32名（男性＝21, 女性＝11)、つがい27名（男性＝19, 女性＝8）、逃避6名（男性＝4, 女性＝2）であった。

図3．記述統計

			原子価				合計
			依存	闘争	つがい	逃避	
性別	男	度数	41	21	19	4	85
	女	度数	46	11	8	2	67
合計		度数	87	32	27	6	152

2）SCAの結果

5件法における1（全くあてはまらない）～5（非常にあてはまる）の回答をそのままスコアとして用いた。

尺度の信頼性を調べるために信頼性分析を行ったところ分析の結果Cronbach Alpha =.883という値が算出され、本尺度の信頼性が証明された。次に各項目における平均値（M）と標準偏差（SD）を算出したところ図4に示される通りになった。

最も高い平均値を示したのはQ4の「自分に生きている価値がないと感じるようになったから」であった。最も低い平均値を示したのはQ23の「生活習慣が崩れてしまったと感じるようになったから」であった。

次にSCAの因子構造を見るために、因子分析（主因子法, バリマックス回転）を行い、図5に示されているとおり4つの因子を抽出した。第1因子を構成している項目（Q6、Q18、Q19、Q17、Q25、Q24、Q1、Q5）は人間関係の支持的な繋がりの喪失に関するものだったので「支持の喪失」と名付けた。第2因子を構成している項目（Q16、Q3、Q10、Q22、Q23、Q14、Q11）は、自分の能力や地位の喪失に関するものだったので「能力の喪失」と名付けた。第3因子を構成する項目（Q8、Q7、Q21、Q2、Q12、Q20）は、自身の内面的な自信の喪失に関するものだったので「自信の喪失」と名付けた。第4因子を構成する項目（Q4、Q13、Q15、Q9）は、自分の将来への期待の喪失に関するものだったので「目標の喪失」と名付けた。

3）各因子と原子価の関係

SCAにおいて、因子分析で抽出された4つの因子についてそれぞれの因子得点を求めた。次に個人の活動的原子価と各因子得点についての関連を調べるために一元配置分散分析を行ったところ、図6に示されている通り、すべての因子に関して有意差が見られた。

図４．項目別の平均値と標準偏差

項目	平均値	標準偏差
1．信頼出来る人が周りにいなくなったと感じたから。	3.39	1.262
2．自分の能力に対する自信を失ったから。	3.27	1.185
3．健康な身体を失ったから。	2.41	1.193
4．自分に生きている価値がないと感じるようになったから。	4.12	0.983
5．逃げ場所がないと感じるようになったから。	3.36	1.247
6．人間関係のストレスに耐えられなくなったから。	3.76	1.2
7．自分らしさを認められていないと感じるようになったから。	3.07	1.221
8．自分の理想とする成果があげられなかったから。	3.12	1.228
9．自分の将来を望めなくなったから。	3.33	1.258
10．仕事上の地位を失ったから。	2.48	1.179
11．自分の弱みが露呈してしまったから。	2.54	1.159
12．自分は人の役に立てないと感じ始めたから。	3.09	1.25
13．生きるための目標が無いと感じるようになったから	3.63	1.183
14．責任から逃れられなかったから。	2.95	1.244
15．世の中が嫌になったから。	3.64	1.193
16．財産を騙しとられたから。	2.37	1.194
17．自分を必要とする人がいなくなったと感じるようになったから。	3.68	1.199
18．頼りにしていた人から裏切られたと感じたから。	3.64	1.107
19．心の休まる場所がないと感じるようになったから。	3.46	1.19
20．人間関係に入り込み過ぎたから。	2.81	1.306
21．自分をアピールできなくなったから。	2.37	1.072
22．頼りにしていた人を亡くしたから。	2.96	1.212
23．生活習慣が崩れてしまったと感じるようになったから。	2.04	1.097
24．親密につきあえる人がいなくなったと感じたから。	3.39	1.202
25．人に理解されなくなったと感じたから。	3.54	1.19

第１因子である支持の喪失においては、５％水準で有意差が見られた（F[151,3]=3.563; p<.05）。図６に示されているように依存原子価が一番高い平均値を示した（M=3.462; SD=.636）。次に高い値を示したのがつがい原子価だった（M=3.313; SD=.863）。その次に高かったのが闘争原子価であった（M=3.073; SD=1.004）。一番低い平均値を示したのは逃避原子価であった（M=2.674; SD=.371）。

第２因子である能力の喪失においては、0.1％水準で有意差が見られた（F[151,3]=15.008; p<.001）。図６に示されているように闘争原子価が一番高い平均値を示した（M=3.238; SD=.574）。次に高い値を示したのが逃避原子価だった（M=2.889; SD=.574）。その次に高かったのがつがい原子価であった（M=2.759; SD=.523）。一番低い平均値を示したのは依存原子価であった（M=2.429; SD=.621）。

第３因子である自信の喪失においては、1%水準で有意差が見られた（F[151,3]=4.549; p<.01）。図６に示されているように逃避原子価が一番高い平均値を示した（M=3.900; SD=1.033）。次に

図5．SCAの因子分析結果

項目内容	因子負荷量			
	1	2	3	4
第1因子：支持の喪失（α=.831）				
Q06. 人間関係のストレスに耐えられなくなったから。	.712	.158	.010	.071
Q18. 頼りにしていた人から裏切られたと感じたから。	.703	.255	.036	−.051
Q19. 心の休まる場所がないと感じるようになったから。	.689	.084	.327	.014
Q17. 自分を必要とする人がいなくなったと感じるようになったから。	.682	.070	.184	.344
Q25. 人に理解されなくなったと感じたから。	.636	.107	.190	.341
Q24. 親密につきあえる人がいなくなったと感じたから。	.575	.002	.255	.207
Q01. 信頼出来る人が周りにいなくなったと感じたから。	.553	.018	.147	−.182
Q05. 逃げ場所がないと感じるようになったから。	.468	.129	.250	.087
第2因子：能力の喪失（α=.766）				
Q16. 財産を騙しとられたから。	.106	.766	−.025	.108
Q03. 健康な身体を失ったから。	.045	.737	−.006	.038
Q10. 仕事上の地位を失ったから。	.097	.594	.162	.260
Q22. 頼りにしていた人を亡くしたから。	.093	.571	.195	−.029
Q23. 生活習慣が崩れてしまったと感じるようになったから。	.011	.566	.400	.085
Q14. 責任から逃れられなかったから。	.403	.527	−.010	.144
Q11. 自分の弱みが露呈してしまったから。	.310	.395	.260	.051
第3因子：自信の喪失（α=.736）				
Q08. 自分の理想とする成果があげられなかったから。	.150	.124	.731	.185
Q07. 自分らしさを認められていないと感じるようになったから。	.372	−.028	.649	.028
Q21. 自分をアピールできなくなったから。	.078	.320	.631	.006
Q02. 自分の能力に対する自信を失ったから。	.173	.058	.536	.141
Q12. 自分は人の役に立てないと感じ始めたから。	.223	.076	.470	.198
Q20. 人間関係に入り込み過ぎたから。	.371	.341	.433	−.231
第4因子：目標の喪失（α=.651）				
Q04. 自分に生きている価値がないと感じるようになったから。	−.107	.002	.168	.714
Q13. 生きるための目標が無いと感じるようになったから	.263	.139	.252	.683
Q15. 世の中が嫌になったから。	.312	.215	−.319	.605
Q09. 自分の将来を望めなくなったから。	.059	.251	.355	.528

因子抽出法：主成分分析　回転法: Kaiserの正規化を伴うバリマックス法
a. 5回の反復で回転が収束しました。

高い値を示したのが闘争原子価だった（M=3.550; SD=.668）。その次に高かったのがつがい原子価であった（M=3.237; SD=.736）。一番低い平均値を示したのは依存原子価であった（M=3.185; SD=.546）。

第4因子である目標の喪失においては、1％水準で有意差が見られた（F[151,3]=4.391; p<.01）。図6に示されているようにつがい原子価が一番高い平均値を示した（M=3.474; SD=.397）。次に高い値を示したのが依存原子価だった（M=3.002; SD=.759）。その次に高かったのが逃避原子価

であった（M=2.833; SD=.924）。一番低い平均値を示したのは闘争原子価であった（M=2.775; SD=.962）。

以上の通り一元配置分散分析では全ての因子において有意差が見られた。

図６．原子価のタイプ別による各因子の得点

因子	原子価				F値	有意確率
	依存	闘争	つがい	逃避		
支持の喪失	3.462 (.636)	3.073 (1.004)	3.313 (.863)	2.674 (.371)	3.563	*
能力の喪失	2.429 (.621)	3.238 (.574)	2.759 (.523)	2.889 (.574)	15.008	***
自信の喪失	3.185 (.546)	3.550 (.668)	3.237 (.736)	3.900 (1.033)	4.549	**
目標の喪失	3.002 (.759)	2.775 (.962)	3.474 (.397)	2.833 (.924)	4.391	**

NOTE；数値は平均値、（　）内は標準偏差を表す。
*は.05以下、**は.01以下、***は.001以下を表す。

６．考察

本研究では自殺について、誰もが持ち得る自殺思考の視点から原因帰属を用いてパーソナリティとの関連を実証的に検証した。パーソナリティに関しては対人関係について明確に扱うため原子価理論を用いた。第１研究において自殺思考はなんらかの「つながりの喪失」が関わっていることがわかり、分類に成功したため本研究の仮説は、「自殺の原因帰属（喪失類型）はパーソナリティの側面である原子価と関係があるだろう」というものになった。第１研究をもとに自殺の原因帰属尺度（SCA）を作成、実施し因子分析を行ったところ４つの因子を抽出することができた。それぞれ、支持の喪失、能力の喪失、自信の喪失、目標の喪失と名付けた。次にそれぞれの因子について因子得点を求め、個人の活動的原子価との間において一元配置分散分析を行ったところ、全ての因子において有意差が見られた。

本研究では第1研究で、自殺思考における原因帰属を喪失を元に分類した。第２研究ではその分類を元に尺度を作成し実施した後因子分析を行い、喪失類型を定めた。この喪失を元にした自殺思考の分類は本研究に限らず、様々な研究において重要な概念となる。

自殺についての研究は盛んに扱われているが、様々な自殺の動機が同じ水準として扱われることが多い。自殺の動機に関して類型化する明確な基準がないために、すべての動機を同じ水準で扱うしかなかった。第１研究において、自殺の動機を原因帰属の観点から「つながりの喪失」を用いて類型化したことで、自殺研究において動機について焦点を当てることが容易となる。

第２研究ではSCAの因子分析を行った後、一元配置分散分析を行い、原子価と自殺の原因帰属の間における関連が示される結果となった。この結果から仮説である自殺の原因帰属とパーソナリティとの関連は立証されたと言える。即ち、個人の活動的原子価が自殺思考に関する喪失類

型に影響を与えているということが証明されたことになる。

自殺の原因帰属における喪失類型と個人の活動的原子価の間に関連があることが示されたならば、自殺に見られる個人差、例えば自殺率の高まる状況にあっても自殺を考えない人について説明がつくことになる。自殺の主な動機とされる病苦や借金などの問題に対して、同じような状況にあっても自殺を考えない人については、個人のパーソナリティに対応した喪失が体験されていないと説明することができる。それはつまり、今現在では自殺思考を持っていなかったとしても、それぞれのパーソナリティに対応する喪失を経験すれば自殺思考を持ち得ることを意味する。自殺の原因帰属、自己知覚理論のモデルに拠れば自己の内的状態においても他者の場合と同様に、行動とそれが起こった状況の性質を考慮した上で推論が行われる。第１研究で用いた尺度、SCA共にAさんの自殺の理由について訊ねているのは、Aさんの原因帰属について推論させる形で自己における原因帰属を答えさせるためである。つまり今現在自殺思考を意識している、していないに関わらず、その人が持っている、あるいは持つ可能性のある自殺思考が現れたと言って良いことになる。

だとすれば、第１研究で被験者全員から自殺思考を取り出すことができたこと、また第２研究で用いたSCAにおいて因子分析を行い因子が抽出できたこと、尺度の信頼性が示されたこと、各項目における回答の平均値と標準偏差の変化、一元配置分散分析において全ての因子に関して有意差が見られたことなどから、本研究の被験者においては誰もが自殺思考を持つ、あるいは持ち得る可能性があるということを示すことができたと言える。つまり被験者全員が何らかの形でAさんの自殺の理由について推論することができていた可能性は非常に高い。

もし自殺思考が誰もが持ち得るものであるとすれば、自殺研究における自殺の扱いが大きく変わることとなる。例えばShneidman（2005）は、自殺既遂者が書いた遺書と、自殺の危険がないと思われる被験者に書かせた遺書についての比較研究を行っているが、誰もが自殺思考を持ち得るのだとすれば、全く新しい視点から遺書研究について可能性を見出すことができる。そしてその可能性は本研究においてとても重要な視点となる。

原子価理論では「活動的原子価が、安定した対象の不在と自我の忍耐力の不十分さで取得出来なかった場合、安定した対人関係は困難になる（Hafsi, 2010）」と述べられている。だとすれば、活動的原子価によって絆を形成していた対象を喪失することによって不安定な心理状態となり、心理的視野狭窄が引き起こされ、自殺思考が生まれると説明することも可能である。

本研究では帰属理論によって、狭窄の起こっていないと思われる自殺思考を取り出し扱うことにした。自殺者が自分の自殺の理由を正しく考察することができないのならば、自殺によって心理的視野狭窄の起こっていない個人から自殺思考を取り出すことが、最も効果的であると考えたためである。自殺行動は、自殺率の高まりから確かに身近な存在となっているが、万人が簡単に扱える問題ではない。しかしそこにはDurkheimが自殺を研究する際に社会的要因に注目し、個人の内面的な心理については閑却したのと同じように、本研究における問題点が存在する。それは即ち、自殺行動を扱わないことによって自殺思考を実証的に扱うために、自殺思考と自殺行動の繋がりに関しては検証しなかった点である。自殺に関して個人に焦点を当て、自殺思考の個人差について見ることができるようになったが、その前提の段階で何が自殺行動へ向かわせるきっ

かけとなるのか、または自殺行動を支える心理は何かという問題については無視する結果となった。

その意味でShneidmanの行った遺書に関する比較研究は、自殺思考と自殺行動の繋がりを検証する効果的な研究でもあると言うことができる。自殺既遂者の遺書と、自殺を経験していない人の書いた遺書の比較研究を行えば、自殺思考を持つ又は持ち得るという条件は全員同じなのだから自殺行動に至ったプロセスについて明確に捉えることができるかもしれない。

またShneidman（2005）が「いくつかの明らかな例外はあるものの、私は他者が自殺することに反対するが、この選択肢を私自身は取っておきたいと考えている」と述べているように、自殺を研究する側にも自殺思考が存在し得ることを十分に認識していなくてはいけない。なおかつそれらの自殺思考にパーソナリティによる個人差が存在するのであれば、ある個人が全ての自殺について同様に扱うことは非常に困難となるはずである。もし様々な自殺を同時に扱うのなら、自分自身に存在する自殺思考と向き合う必要がある。その過程によって自分が共感できる自殺、共感できない自殺に関する洞察も深まるであろう。前述における自殺の是非に関する議論でも、個人個人が自殺思考を持ち得るという視点が抜け落ちてしまっていることが多い。自分の自殺思考が意識できないからといって、自分と自殺を切り離して考えることは非常に危険である。

これらの結果と考察から、本研究においての課題と同時にこれからの自殺研究に関する大きな可能性を見出すことができる。今後の課題としてまず挙げられるのが原子価を用いる際に、各原子価における人数が大きくばらけている点である。今回の被験者は152人であったが、一番多かった依存原子価は87名であるのに対し、逃避原子価に関しては６人分のデータしか集まらなかった。これらの開き、また逃避原子価のデータの少なさに関しては、統計処理を行う上で信頼性を欠く結果になった。

また因子分析を行い、抽出した因子について「支持の喪失」「能力の喪失」「自信の喪失」「目標の喪失」と名前を付けたが、それぞれの項目に対して各原子価群における個人がどのような意味づけを行っていたのかについての検証は十分であるとは言えない。第１研究における結果やパーソナリティ理論に基づき推論を行ったが、作成した項目に関しても、ある一つの喪失についてだけ焦点が当てられているのかの検証は不十分である可能性が高い。また、提示したストーリーに関しても課題を残している。即ち、本研究においてはこれらの因子で考察を試みたが、これからの自殺研究において、より有用な尺度とそれに伴う因子が生まれることは十分に有り得る。そういった観点から本研究では各原子価における一元配置分散分析後の多重比較について言及していない。原子価間の間に平均値の差は見られているが、尺度の妥当性、また因子の妥当性について未だ多くの余地を残すために、パーソナリティとの関連があるという結論に留めている。自殺思考は誰もが持ちうるものであり、かつパーソナリティによって違いがあるということが示されるだけでも、自殺研究は飛躍的に進歩すると考えられる。本研究においても、そういった観点から本研究を捉え直し、新しい尺度の作成、基本概念の再検討を繰り返し行うことで妥当性を強化していくことは可能であると考えられる。

自殺研究において長い間問題となっていた様々な点について、本研究の立場から飛躍的に解決へ向かうものもあるであろう。哲学や宗教が長い間戦ってきた自殺という問題に関して心理学の

立場から新しい視点を投げかけることによって、これからの自殺研究に新たな局面が訪れることを期待する。

付　記

本論文を作成するにあたり、一方ならぬご指導を賜りました奈良大学Med Hafsi教授に心より感謝致します。また、本研究にご協力いただいた奈良大学の研究生、大学院生、学部生の皆様に心より御礼申し上げます。

参考文献

芥川龍之介（1927）『或旧友へ送る手記』日報社.

Alvarez, A.（1972）. *The Savage God: A Study of Suicide*. New York: Random House 1972. 299 pp..

Beck, A.T. & Steer, R. A.（1993）. *Manual for the Beck Depression Inventory*. San Antonio: The Psychological Corporation.

Bem, D. J.（1972）"Self-perception Theory". In Berkowitz, L.（ed.）, *Advances in Experimental Social Psychology*, vol. 6.

Bion, W.（1961）*Experiences in groups and other papers*. London: Tavistock.

Freud, S.（1920）Jenseits des Lustprinzips. Internationaler Psychoanalytischer Verlag. Freud, S & Josef, B.（1895）Studies on Hysteria, *The Standard Edition of the Complete Psychological Works of Sigmund Freud*. trans. by James Strachey, vol. II（1893-1895）. London, Hogarth Press.

Hafsi, M.（1997）Valency and its measurement: validating a Japanese Version of the reaction to Group situation test（RGST）. *Psychologia an international journal of psychology in the orient*, Vol. XL, 3, 152-162.

Hafsi, M.（2003）『ビオンへの道標』ナカニシヤ出版.

Hafsi, M.（2004）『「愚かさ」の精神分析－Bion的観点からグループの無意識を見つめて』ナカニシヤ出版.

Hafsi, M.（2010）『「絆」の精神分析－ビオンの原子価の概念から「原子価論」への旅路』ナカニシヤ出版.

Hafsi, M.（2010）『目に見えない人と人の繋がりをはかる～原子価査定テスト（VAT）の手引き～』ナカニシヤ出版.

Heider, F.（1958）*The Psychology of interpersonal relations*. New York: John Wiley.

井口孝親（1934）『自殺の社会学的研究』清和書店.

加藤正明（1954）『自殺. 異常心理学講座第 1 巻』みすず書房.

大原健士郎（1965）『日本の自殺;孤独と不安の解明』誠心書房.

Shneidman, E. 高橋祥友訳（2005）『*Suicide As Psychache. A Clinical Approach to Self-Destructive Behavior*. シュナイドマンの自殺学－自己破壊行動に対する臨床的アプローチ』金剛出版.

Shneidman, E. 高橋祥友訳（2005）『*Auto of A Suicidal Mind*. アーサーはなぜ自殺したのか』誠信書房. 高橋祥友（1992）『自殺の危険－臨床的評価と危機介入－』金剛出版.